

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 禹 政 汎

本論文は、韓国ソウル市の漢江沿いに散在する、地域のコミュニティのための伝統的儀礼施設である府君堂（ブグンダン）を対象に、ソウルの近代化とりわけインフラ整備と用途地域制の適用による都市の文脈の変化が、府君堂を中心とする旧来のコミュニティにどのような変化を及ぼしたかを明らかにすることによって、府君堂に文化的景観としての性格付けを行うための基礎となる知見を得ようとするものである。

府君堂は、近代以前は生業等で関係を有する人々が儀礼を行う施設として、地域のなかで機能してきた。しかし近代化とともに府君堂の儀礼への参加者は減少し、その性格や地域における位置付けも変容してきている。府君堂に関する既往の研究は多くあるが、その大半が民俗学的もしくは歴史学的アプローチである。本論文のように、ソウルの近代化のプロセスに焦点をあてて、都市の文脈との関わりから府君堂の空間とコミュニティの変化を分析しようとする研究は先例がない。

本論文は、全5章で構成されている。

第1章は序論として、韓国において今後持続的な都市づくりを目指すうえで、コミュニティプランニングを視野に入れた都市デザインが重要であるとの認識のもと、近代以前から現在に至るまで形を変えながらも存続している府君堂に着目することの価値と意義が述べられている。

第2章は、府君堂に関する一般的な説明、および既往の知見の整理にあてられている。既往の研究はその大半が民俗学的・歴史学的な関心に基づくものであり、府君堂の特徴や意義を都市におけるコミュニティという観点から掘り下げようとするものではないことが示されている。とくに、近代化の過程で府君堂のコミュニティはさまざまな変容のパターンをとるが、既往の知見ではその差異を説明することができないことが指摘され、本論文の独自性が明らかにされている。

第3章は、文献調査と古地図の分析に基づいて、近代化による変化のパターンを代表する8箇所の府君堂を抽出し、とくにインフラ整備との関連から、その変化の過程を明らかにしている。近代化初期の鉄道建設による都市の拡大と、1950年代から80年代にかけての漢江沿いの治水事業や橋梁建設が、それぞれの地域の府君堂のありかたに個別に影響を与えたことが明らかにされている。とくにハンナム府君堂とバンソム府君堂においては、

コミュニティを主導するグループの性格が、従前の生業を軸とする協働的なものから郷友会的なものへと変化するが、1967年から1969年にかけて進められた第一次漢江総合開発事業がその転換点になったことが明らかにされている。

第4章では、文献調査、用途地域図の分析に加えて関係者へのインタビューを基礎データに、近代都市計画による用途地域制の施行が現在の府君堂のコミュニティの性格にどのように関係しているか論じている。とりわけ近隣商業地域においては、府君堂のコミュニティを主導するグループは、商業活動における協働的な関係を維持しており、また府君堂の儀礼への参加者数は、当該地域における協働的商業活動への新規参加者の存在に影響を受けてきていることを明らかにしている。

最後に第5章は、結論として総括を行うとともに今後の研究の発展の方向性と課題を述べている。

本論文は、近代化による都市の文脈の変化にたいして、府君堂という伝統的なコミュニティがどのように対応し、変容をとげつつ現在に至るまで適応的に存続してきているかを、とくにインフラ整備と都市計画に着目することによって明らかにしている。これは、従前は歴史学・民俗学的関心と方法論に拠ることが一般的であった府君堂に関する既往研究に照らして、府君堂の文化的景観としての価値や可能性、それを生かしたコミュニティプランニングやコミュニティオリエンテッドの都市計画・まちづくりへの展開の可能性を示唆している点で、大きな意義が認められる。日本に遅れて少子高齢化、人口減少が進行するであろう韓国においても、今後、コミュニティベースの都市計画やまちづくり・都市空間デザインの必要性和重要性は、いっそう高まることが確実視される。その意味で、本論文は時宜に適った社会的意義と有用性を備えているものであり、社会基盤学および工学に対する寄与は大きい。

よって本論文は、博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。

以上